朝鮮三国時代における出家女性と比丘尼教団

- ジェンダー的視座からの考察 -

発表者：WOO JONGIN（大谷大学）

本発表は、朝鮮三国時代（紀元前1世紀頃～668年）における出家女性、すなわち比丘尼教団の形成とその宗教的・社会的役割を、ジェンダー的視座から考察することを目的とする。朝鮮に仏教伝来以後、女性の出家は国家的・教团的枠組みの中でどのように位置づけられたのかという問いを中心に、以下の三つの観点から分析を行う。

第一に、教団制度における両性の平等性（institutional androgyny）を取り上げ、比丘教団と比丘尼教団の制度的関係性や階層構造の分析を行う。具体的には、新羅時代に国家によって再編成された仏教教団における僧官のうち、尼僧官である「都唯那娘」を設置した歴史的背景およびその機能に注目する。この分析を通じて、王族女性が仏教教団の制度的再編において重要な役割を果たしていたことを明らかにし、その結果として当該時期の教団体制内において男女間の制度的平等性がある程度実現されていたことを確認する。

第二に、仏教教義における救済論的包摂性（soteriological inclusiveness）の観点から、女性出家者に与えられた救済の可能性とその制限について検討する。とりわけ『法華経』における龍女成仏説をめぐる龍女が男性の身体に変化した後に成仏したとする唯識法相宗の立場と、龍女がそのままの姿で即身成仏したと解釈する華嚴宗の立場とが併存していたことが確認される。こうした龍女成仏をめぐる見解の相違にもかかわらず、女性の成仏不可能性を強調したり、女性の身体を否定して男性に生まれ変わることを願うような傾向よりも、あらゆる衆生の成仏を志向する包括的な救済論が顕著であったことを明らかにする。

第三に、仏教教理に内在した女性嫌悪（doctrinal misogyny）に着目する。すなわち、仏教教団内において女性出家者の地位や役割が高かったにもかかわらず、依然として男性僧侶の間で、教理的根拠に基づく女性嫌悪的傾向が確認される。具体的には、玄一（生没年不詳）や義寂（681-没年不詳）といった僧侶たちは「女性五障説」を支持しており、中国で活動した新羅僧円測（613年 - 696年）や遁倫（または道倫、生没年不詳）も、女性の身体では菩薩になることができないという立場を取っていた。さらに、新羅法相宗の僧侶である太賢（生没年不詳）も女性の身体に対して否定的な見解を示していたことが確認される。

以上の考察を通じて、朝鮮三国時代における出家女性と比丘尼教団の特質および歴史的意義を明らかにするとともに、これらを女性学・ジェンダー研究の視座から再定位することの重要性を提示する。本研究は、従来の仏教史的枠組みにとどまらず、宗教制度における女性の主体性やジェンダー構造を再検討するための一試論となることを目指すものである。

キーワード： 出家女性、比丘尼、朝鮮仏教、ジェンダー、仏教教団